

|             |   |
|-------------|---|
| 研究課題名       | NSCLC 患者における中枢神経病変と中枢神経外病変に対する抗 PD-1 抗体の効果の比較   |
| 研究責任者名      | 広島大学医歯薬保健学研究科分子内科学 教授 服部 登  |
| 研究期間        | 2018年11月5日～2019年3月31日   |
| 対象者         | 切除不能の進行または術後再発非小細胞肺癌 (non-small cell lung cancer; NSCLC) に対して、2014年7月から2018年8月の期間中に抗PD-1 (programmed cell death -1) 抗体による治療を受けた患者様を対象とします。  |
| 意義・目的       | <p>切除不能NSCLCは予後不良の疾患ですが、肺癌の分子生物学的な研究の進歩により多種多様な分子標的治療薬が開発および使用されるようになったことに起因して、予後は飛躍的に延長しました。さらに、近年では免疫チェックポイント阻害剤である抗PD-1抗体による免疫療法がNSCLCに保険適応となり、さらなる全生存期間の延長が報告されており、今後は益々この抗PD-1抗体の使用頻度が増加していく事が予想されます。</p> <p>切除不能NSCLCの経過中に、中枢神経 (central nerve system; CNS) 転移の出現はしばしば経験され、その頻度は40%以上という報告もあります。CNSによる神経症状の出現は、NSCLC患者のActivity of Daily Livingを低下させ、治療導入や継続が困難となるため、重要な予後不良因子であることが知られています。</p> <p>NSCLC患者において、抗PD-1抗体の効果 (Progression Free SurvivalとOverall Survival) に対して中枢神経転移の有無は影響しないことが報告されつつあります。しかし、実臨床では抗PD-1抗体の効果がCNS外で得られても、CNSでは得られない症例が経験されます。そこで、抗PD-1抗体の効果がCNSとCNS外で乖離する症例の割合を明らかにし、この乖離に影響する因子を後方視的に検討する事を目的として本研究を計画しました。</p> <p>本研究結果は、脳転移を有するNSCLC患者に対して抗PD-1抗体を投与して良いか、それとも抗PD-1抗体の投与前に脳転移に局所放射線治療を行うべきかを判断する際に役立つものと考えられます。</p> |
| 方法          | 本研究は、診療録 (カルテ) 情報を調査して行います。カルテから使用する内容は年齢、性別、治療歴、血液検査、病理結果、CNS 転移の有無、抗腫瘍効果などです。(個人を特定可能な情報は解析に用いません)  |
| 共同研究機関      | 特にありません。  |
| 試料・情報の管理責任者 | 広島大学医歯薬保健学研究科分子内科学 教授 服部 登  |
| 個人情報の保護について | <p>調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。</p> <p>研究に資料を提供したくない場合は 2019 年 3 月末日までにお申し出ください。お申し出いただい</p>  |

も不利益が生ずることはありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

T e l : 082-257-5196

広島大学病院 医歯薬保健学研究科分子内科学 大学院生 三浦 慎一郎

研究機関：広島大学